

芝病害との出会い

笹野市蔵

筆者は昭和59年に県を退職し、農業資材会社に入社した。この時期は、国、各都道府県ともにゴルフ場には殆ど無関心の状況であった。その中で、セールスとゴルフ場を巡回しグリーンキーパーと種々の話をしている中で、病徴と菌が分からないままの防除状況であり、病徴と菌を調べて欲しいとの強い要望があったものの、筆者は全くゴルフを知らなく、ゴルフ用語が分からなかったので手探りの状態から出発した。今回は比較的新しいというか珍しかった病害を述べてみたい。①雪腐病については、昭和60年12月10日に平地で1m位の積雪があり、これが根雪となり翌春融雪期が過ぎても芝の芽が出てこない、と各ゴルフ場から電話があり出向いた。驚いたことにこうらい芝のグリーンでは殆ど芽がでていなく枯死状態であった。葉、葉柄、葉鞘と検鏡してみると、葉柄及び葉鞘の部分に卵胞子が多数確認され、*Pythium spp*菌による褐色雪腐病であった。また、ベントグラスは寒地芝であるがグリーン全面が枯れており、褐色の菌核がみられたので、*Typhula incarnata*菌による雪腐褐色小粒菌核病と同定した。この年の春は雪腐病が大発生したため、石川県のみならず、福井県、富山県のゴルフ場からも呼び出され多忙を極めた。また、平成5年3月にベントグラスにパッチ状の病徴があるとのことで出向いてみると確かにパッチが見られ、検鏡すると*Fusarium*菌の分生子が多数みられたが暖冬の年であり、降雪があったものの2~3日で溶ける状況で雪腐病とは考えられなかった。ところが、平成5年の病理学会で雪が降らなくても*Fusarium*菌 (*Microdochium nivale*) による雪腐病が発生することが報告されていたので紅色雪腐病と同定した。②いもち病については昭和62年8月下旬にティーグラウンドの洋芝が1~2日間で全面が枯れたとの連絡があり、現地へ赴くと驚いたことにティーグラウンド全体が褐色に枯れて見るも無残なものであった。検鏡したところ*Pyricularia*菌の分生子が多数みられ、いもち病であることが分かった。③粘菌病(ほこりかび病*Mucilago physarum*)は、こうらい芝、ベントグラス共に寄生する。某ゴルフ場から一晩にこうらい芝に卵らしきものが多数産み付けられているとの連絡で、現場に行ってみると、グリーンの葉に卵状の胞子のうが見られ、一見して粘菌病であると分かった。一般には芝には害はないものと説明し、一件落着した。④立枯病は*Gaeumannomyces*菌でベントグラスではテイクオールパッチ (*G. graminis*)、こうらい芝ではゾイシアデイクライン (*G. graminis* var. *graminis*) は、ベントグラスではやや不鮮明なパッチができる。菌糸には長円型の菌足、フラスコ型の子のうかく、子のうが形成される。こうらい芝では下葉が枯れあがり、病斑は鮮明なものもあるが、不鮮明なものが多い。菌足は握りこぶし状、または裂片状で多数形成するのが特徴である。⑤ホワイトブライトについて、平成6年8月上旬、ベントグラスにきのこが生える病気が発生し、病徴は5cm~1m内外のパッチ状で灰白色に枯れ、健全部との境界は明瞭で、枯死部分には子実体「きのこ」がみられ、これは乾燥すると見えにくいと水分を与えると傘が開き見易くなる。病原菌は*Melanotus phillipsii*と考えられ北陸病虫研で発表したもので、筆者らが日本で始めて報告したものと思われる。以上、5つの病害を述べたが、何分にも芝病害は全く未知への挑戦であり不十分ながら今日までゴルフ場から頼りにされて、きて欲しい、見て欲しいと言われることは技術屋として冥利に尽きると言えよう。更に、好きな病理を楽しみながら仕事としてこれたのも筆者は幸運であった。今後も微力ながら貢献していきたいと思う。